

新古今集の語彙論的考察

三十回生 尾方敏子

目次

序論

第一章 全語彙数について

第一節 言語量

第二節 異なり語数と品詞百分比

第三節 平均使用度数

第二章 品詞別語彙数について

第一節 名詞

第二節 動詞

第三節 形容詞

第三章 意義分類

第一節 語彙量

第二節 共通語と単独使用語

序論

語彙論は比較的新しく開発された分野であるため種々の問題があるが、文学作品に使用されている語彙とその作品の性質との間にある、つながりというものが見出させる。

小論では、「新古今集」を取りあげ、主に「古今集」と比較しながら語彙面での考察を行い、和歌文学における「新古今集」の特色、或いは「古今集」との類似性等を探って行きたいと思う。(以下「新古今」「古今」と称す)

猶、調査は、滝沢貞夫編「新古今集総索引」に拠った。

第一章 全語彙について

第一節 言語量

小宮堅次郎氏蔵本「新古今和歌集」に使用されている自立語総数は三〇・八七八語である。この言語量を他氏の調査による他作品と比較すると表1になる。この表から「古今」と比較しても充実しており、作品の量としては随筆や物語のジャンルのにそれに匹敵する大きさであることがわかる。

第二節 異なり語数と品詞百分比

大野晋氏によれば、ある作品の文章性格は、その作品に使用されている品詞別異なり語数の比によってある程度知る事ができる。

「新古今」に使用されている異なり語数は二、七六〇語、

その品詞別比率は表2の通りである。「新古今」は体言止めという修辭の多用により僅かに「古今」より名詞の比率が上回っている一因と考えられる。更に、大野氏が呈示した九作品の相関図に「新古今」を組み入れてみた。これよ

<表1> 自立語総数比較表

作品名	延べ語数	新古今との比	備考
新古今集	30,878	100	
古今集	18,216	59.0	
後撰集	11,964	38.7	宮島氏の御調査による
土佐日記	3,425	11.1	同上
枕草子	32,906	106.6	同上
落窪物語	27,224	88.2	江口教授の御調査による

り、素材の変化が多様になり、しかも描写、叙述が複雑であって、内容・表現とともに、時代を経るにつれて順調に豊かになったことが分かる。

以上のことから、「古今」は語彙や表現力が豊かで変化に富むものと言え、「新古今」は何度も同じ語を繰返し用いる傾向があり、「古今」の頃より歌語が整理され、歌語として確立化してきているということが言える。

第三節 平均使用度数

表現性を平均使用度数によって探る。一つの語が平均何回使用されたか、表3に示し比較した。これより、作品の

<表2> 異なり語数と品詞別百分率
()内は%

	新古今	古今
名詞	1,658 (60.1)	1,150 (55.5)
動詞	817 (29.6)	650 (31.4)
形容詞	97 (3.5)	99 (4.8)
形容動詞	43 (1.6)	34 (1.6)
その他	145 (5.3)	138 (6.7)
計	2,760	2,071

が上回っている一因と考えられる。更に、大野氏が呈示した九作品の相関図に「新古今」を組み入れてみた。これよ

<表3> 平均使用度数

	新古今	古今	土佐	枕草子	落窪
名詞	5.95	4.67	3.52	5.15	6.28
動詞	6.92	5.48	4.15	5.92	8.86
形容詞	8.61	5.84	3.20	15.19	8.76
形容動詞	4.47	2.79	1.96	4.24	4.97
副詞	5.26	3.07	3.66	21.82	
その他	2.93	2.63	4.34	12.65	14.15
全体	6.24	4.83	3.71	6.27	7.90

量の大きさ、同語を繰返し使用する傾向など先に示した考察を確認できると言える。

ところで作品によって使用される語に違いが生じてくる

表珥性を平姪使用度数によって探る。一二の語が平姪何回使用されたか、表3に示し比較した。これより、作品の

と思われる。そこで表4に使用度数上位30語を示した。「新古今」と「古今」は共通する語が多い、当然の結果を得た。しかし「つき」だけ大きく順位が違っているがこれについては第三章に譲ることとする。

第二章 品詞別語彙数について

第一節 名詞

「新古今」に使用されている品詞は一、六五八語九、八五九例である。この使用度数分布状況を調べてみると、異なり語数と延べ語数の関係より「新古今」は、同じ語を何回も繰返し使用して、「古今」より、より一層歌語として確立したものが使われるようになったという、前述した考察を再確認できる結果と考えられる。

そのような中でどのような語が多く使用されているのか高使用度数上位30語を示したのが表5である。「古今」と比較すると、多少の順位のずれは認められるものの、「ひとはな・あき・み・ころ・はる」などは歌語において最も基本的、基礎的な語であると言えよう。反面、「つき」「つゆ」など「新古今」と「古今」とでの使用度数の違いも見られ、歌語としての名詞にも、時代が進むにつれて僅かに変化が見られると言えらるだろう。

「新古今」と「古今」は同じジャンルであるため、共通語を調べるとその比率は大きくなる。表6より、六割も「古今」は「新古今」と共通する語が占めるのが分かる。これは、やはり「新古今」は、「古今」をその模範としたことに拠るものと言える。また、高使用度数の共通語は、いづ

<表4> 主要語彙表上位30語

古 今 集			
順位	語	度数	%
1	ひと	231	23.09
2	あり	180	17.99
3	みる	168	16.79
4	おもふ	159	15.89
5	なし	153	15.29
6	はな	147	14.69
7	わ (我)	135	13.49
8	す<サ変>	124	12.39
9	ところ	109	10.89
10	あき	106	10.59
11	なく	87	8.70
12	しる	85	8.50
13	く<カ変>	83	8.30
"	み (身)	"	"
15	きみ	80	8.00
16	われ	79	7.90
17	もの	77	7.70
18	なる	75	7.50
19	はる	70	7.00
20	あふ	67	6.70
21	ちる	65	6.50
"	こと	"	"
"	いろ	"	"
24	いふ	62	6.20
25	ふる	54	5.40
"	たつ	"	"
27	とき	52	5.20
28	みゆ	51	5.10
"	ゆく	"	"
30	やま	50	5.00

新 古 今 集			
順位	語	度数	%
1	つき	266	15.45
2	ひと	248	14.40
3	みる	227	13.18
4	あり	218	12.66
5	おもふ	210	12.20
6	あき	209	12.14
7	なし	206	11.96
8	す<サ変>	195	11.32
9	そで	167	9.70
10	はな (花)	162	9.41
11	み (身)	150	8.71
12	つゆ	149	8.65
13	ところ	144	8.36
14	はる	125	7.26
15	しる	122	7.08
16	そら	121	7.03
17	わ (我)	113	6.56
18	かせ	110	6.39
"	よ (世)	"	"
20	まつ (待)	104	6.04
21	よ (夜)	103	5.98
22	ふく	101	5.87
23	もの	86	4.99
24	みゆ	82	4.76
"	いろ	"	"
26	とふ	80	4.65
"	なく	"	"
28	ゆめ	78	4.53
29	むかし	76	4.41
30	なる (成)	73	4.24

<表5> 名詞主要語彙（上位30語）

新 古 今				古 今			
順位	語	度数	%	順位	語	度数	%
1	つき	266	15.45	1	ひと	231	23.09
2	ひと	248	14.40	2	はな	147	14.69
3	あき	209	12.14	3	わ（我）	135	13.49
4	そで	167	9.70	4	あき	109	10.89
5	はな	162	9.41	5	こころ	"	"
6	み（身）	150	8.71	6	み（身）	83	8.30
7	つゆ	149	8.65	7	きみ	80	8.00
8	こころ	144	8.36	8	われ	79	7.90
9	はる	125	7.26	9	もの	77	7.70
10	そら	121	7.03	10	はる	70	7.00
11	わ（我）	113	6.56	11	いろ	65	6.50
12	かぜ	110	6.39	"	こと	"	"
"	よ（世）	"	"	13	とき	52	5.20
14	よ（夜）	103	5.98	14	やま	50	5.00
15	もの	86	4.99	15	いま	49	4.90
16	いろ	82	4.76	16	かぜ	48	4.80
17	ゆめ	78	4.53	17	よ（世）	45	4.50
18	むかし	76	4.41	18	よ（夜）	41	4.10
19	なみ	70	4.07	19	な（名）	39	3.90
20	けふ	69	4.01	20	そで	38	3.80
"	やま	"	"	"	ゆき	"	"
22	いま	67	3.89	22	やど	36	3.60
23	こと	66	3.83	23	なに	35	3.50
24	きみ	65	3.77	"	ほととぎす	"	"
25	なみだ	64	3.72	25	ごと	34	3.40
26	やど	60	3.48	"	こゑ	"	"
27	かげ	58	3.37	"	なみだ	"	"
"	くも	"	"	"	みづ	"	"
"	こゑ	"	"	29	とし（暦年）	32	3.20
"	ゆき	"	"	"	よのなか	"	"
"	ゆふぐれ	"	"				

<表

順位
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
"
15
16
17
18
19
20
21
"
"
24
25
"
27
28
"
30

<表 6>

		新	古	今	古	今
異 なり 語 数	共 通 語	657	39.6	(%)	657	57.1
	単 独 使 用 語	1,001	60.4		493	42.9
	計	1,658	100.0		1,150	100.0
延 べ 語 数	共 通 語	8,001	81.2		4,661	86.7
	単 独 使 用 語	1,858	18.8		713	13.3
	計	9,859	100.0		5,374	100.0

れも各々の主要語彙上位30語内に含まれている。

第二節 動詞

動詞の語数は、異なり語数八一七語（二九・六％）、延べ語数五千六五五語（三二・八％）である。この比率は「古今」より僅かに低い。これを活用の種類別に見ると四段活用が約半数を占め、次に下二段活用が多く、この傾向は、「古今」もほぼ同じである。また、平安時代に四段活用から二段活用に転じたとされる語の中で「生く」に古い四段活用が残っていた。まだ歌語ではこの移行が充分に定着していなかったことが分かる。

動詞の使用度数分布を調べると、異なり語数の四六・五％に当たる三八〇語が一回しか使用されず、六回までで全体の八割を占めている。しかし延べ語数では使用度数五一回以上で四〇・一％を占めてしまう。「古今」との関係は、名詞の場合とほぼ同じであることが分かった。

では、どのような語が使われているか、表7に主要語彙上位30語を示した。30語中20語も「古今」と共通して、「みる・あり・おもふ・す」を基本語彙としてあげることができる。動詞は、名詞より更に「古今」との類似性が高いと言える。

次に「古今」との共通語を見ると表8になる。全体的には、両作品とも共通語が優勢であると言えよう。「新古今」のナ変の単独使用語は「いぬ」であるが、「古今」では類義語「去る」が使われていたものが、二語の微妙な違いが認められて「新古今」に至って歌語として認められたものと思われる。歌語が確立化されていくのと同時に、表現も豊かになっていった事が窺える。しかし、素材の特質には、全般的には特色と言えるものは見出せなかった。

第三節 形容詞

形容詞は、異なり語数九七語、延べ語数八三五語の語数

重言の言葉は、身た、言葉ノ一、言、二、三、フ、ク、
 べ語数五千六五五語(三二・八%)である。この比率は「古今」より僅かに低い。これを活用の種類別に見ると四段活

形容詞は、異なり語数九七語、延べ語数八三五語の語数
 第三節 形容詞

<表7> 動詞主要語彙(上位30語)

新 古 今				古 今			
順位	語	度数	%	順位	語	度数	%
1	みる	227	13.18	1	あり	180	17.99
2	あり	218	12.66	2	みる	168	16.89
3	おもふ	210	12.20	3	おもふ	159	15.89
4	す	195	11.32	4	す	124	12.39
5	しる	122	7.08	5	なく	87	8.70
6	まつ	104	6.04	6	しる	85	8.50
7	ふく	101	5.87	7	く	83	8.30
8	く	97	5.63	8	なる	75	7.50
9	みゆ	82	4.76	9	あふ	67	6.70
10	とふ	80	4.65	10	ちる	65	6.50
"	なく	"	"	11	いふ	62	6.20
12	なる	73	4.24	12	たつ	54	5.40
"	ふる	"	"	"	ふる	"	"
14	ちる	70	4.07	14	ゆく	51	5.10
15	あふ	65	3.77	"	みゆ	"	"
16	たつ	64	3.72	16	こふ	42	4.20
"	ゆく	"	"	17	まつ	41	4.10
18	きく	61	3.54	18	ふ	38	3.80
"	ふ	"	"	19	ぬ	37	3.70
20	ながむ	59	3.43	20	あく	36	3.60
21	おく	57	3.31	21	さく	35	3.50
22	いふ	54	3.14	22	いづ	34	3.40
23	いづ	52	3.02	23	ふく	33	3.30
24	わする	50	2.90	24	きく	31	3.10
25	しのぶ	47	2.73	25	おく	27	2.70
26	すぐ	46	2.67	"	ながる	"	"
27	たゆ	45	2.61	27	てふ	26	2.60
28	ぬ	42	2.44	28	うつろふ	25	2.50
29	ぬる	41	2.38	29	すむ	24	2.40
30	きゆ	39	2.26	30	をる	23	2.30
				"	わかる	"	"

<表8> 動詞異なり語数活用型別比較表

	四		上一		上二		下二		カ変		サ変		ナ変		ラ変	
共通語 (%)	210 (46.1)	210 (59.2)	8 (38.1)	8 (53.3)	15 (55.6)	15 (51.7)	107 (39.8)	107 (49.8)	13 (41.9)	13 (56.5)	1 (16.7)	1 (50.0)	2 (66.7)	2 (100)	3 (75)	3 (14.3)
単独使用語 (%)	246 (53.9)	145 (40.8)	13 (61.9)	7 (46.7)	12 (44.4)	14 (48.3)	162 (60.2)	110 (50.2)	18 (58.1)	10 (43.5)	5 (83.3)	1 (50)	1 (33.3)	0 (0)	1 (25)	4 (85.7)
計 (%)	456 (100)	355 (100)	21 (100)	15 (100)	27 (100)	29 (100)	269 (100)	217 (100)	31 (100)	23 (100)	6 (100)	2 (100)	3 (100)	2 (100)	4 (100)	7 (100)

動詞延べ語数

	四		上一		上二		下二		カ変		サ変		ナ変		ラ変	
共通語 (%)	2,688 (86.2)	1,450 (74.2)	266 (93.7)	204 (95.8)	164 (99.2)	129 (86.6)	1,156 (80.7)	673 (83.6)	125 (83.9)	97 (89)	195 (95.1)	124 (97.6)	5 (50)	11 (100)	236 (94.4)	189 (93.3)
単独使用語 (%)	429 (13.8)	505 (25.8)	18 (6.3)	9 (4.2)	43 (0.8)	20 (13.4)	277 (19.3)	132 (16.4)	132 (16.4)	12 (11)	10 (4.9)	3 (2.4)	5 (50)	0 (0)	14 (5.6)	4 (6.7)
計 (%)	3,117 (100)	1,955 (100)	284 (100)	213 (100)	207 (100)	149 (100)	1,433 (100)	805 (100)	805 (100)	109 (100)	205 (100)	127 (100)	10 (100)	11 (100)	250 (100)	193 (100)

※ 各活用型の左=新古今集、右=古今集

を持つ。

異なり語数、延べ語数を活用別に示したのが表9である。ク活用の方がどちらかと言えば多い「新古今」は比較的状

態表現が多く、「古今」は心理描写が多いといえるのではないか。そして、これは二作品の持つ性格を示し、主題をも暗示していると考えられる。活用形別に形容詞を見ると、これを更に活用の種類別に分類すると、語幹の甲乙では、

異なり語数、延べ語数を活用別に示したのが表9である。ク活用の方がどちらかと言えば多い「新古今」は比較的状态

<表9>

	新 古 今		古 今	
	異なり語	延べ語	異なり語	延べ語
ク活用	69 (71.1)	630 (75.4)	69 (69.7)	417 (72.1)
シク活用	28 (28.9)	205 (24.6)	30 (30.3)	161 (27.9)
全 体	97 (100)	835 (100)	99 (100)	578 (100)

音便形は「古今」で僅かに一例あるだけである。既に音便形は使用されていたのであるが、当時、音便は口語として考えられており、形式を重んじる和歌の言葉としては、品格が劣ると考えられていたのであろう。よって制約の厳しくなっていた歌語の中で整理されていき、「古今」ではそれでも一例見られていたものが「新古今」では皆無という事になったのである。

ないか。そして、これは二作品の持つ性格を示し、主題をも暗示していると考えられる。活用形別に形容詞を見ると、

これを更に活用の種類別に分類すると、語幹の用法では、語幹に「み」がついた用法がとて多い。その中でも「新古今」は他の語幹の用法もあらわれて喚体句や直接体言に付いて修飾する用法も見られるようになる。語幹の用法が口語に定着して、歌語でも取り入れられるようになったことが分かるのである。

次に、使用度数の広がりを見ると、「新古今」は度数9回まででやっと八割に達するのに「古今」は6回で八割を越える。形容詞も「新古今」は繰返し同じ語を使用しているということが分かる。

どのような語が多く使われているのか。表10に主要語彙上位20語に示した。基本語彙としては「なし・うし・かなし・こひし」などあげられる。また、上位20語中13語、それも上位の方に共通する語彙が多いことから、二作品の類似性が認められるだろう。

第三章 意義分類 第一節 語彙量

「古今」と共通性を多く持つ「新古今」であるが、その特色と言える世界の象徴が使用される語に浮びあがるだろう。そこで名詞を意味によって分類、整理して個性を明らかにする。表11を見ながら大項目ごとに考察していく。「新古今」と「古今」は似かよった構造をしていて、(5)(自然物・自然現象)と(1)(抽象的關係)が多く占めている。つまり物語より主体なるものは狭く限定されており、人間活動より自然や抽象的な関係のものに多く興味が向けられて

<表10> 形容詞主要語彙（上位20語）

新 古 今					古 今				
順位	語	活用	度数	%	順位	語	活用	度数	%
1	なし	ク	206	11,963	1	なし	ク	153	15,292
2	うし	ク	53	3,078	2	こひし	シク	45	4,498
3	ふかし	ク	50	2,904	3	うし	ク	41	4,098
4	かなし	シク	43	2,497	4	かなし	シク	28	2,799
5	つらし	ク	27	1,568	5	をし	シク	15	1,499
6	こひし	シク	26	1,510	6	たかし	ク	13	1,299
7	さむし	ク	25	1,452	"	ふかし	ク	"	"
"	はかなし	ク	"	"	8	さむし	ク	12	1,199
9	ながし	ク	23	1,336	"	わびし	シク	"	"
10	おなじ	シク	19	1,103	10	しげし	ク	11	1,099
11	ちかし	ク	16	0.929	"	はかなし	ク	"	"
12	すずし	シク	15	0.871	"	くるし	シク	"	"
"	をし	シク	"	"	13	つれなし	ク	10	1,000
14	つれなし	ク	14	0.813	14	ちかし	ク	9	0.900
"	むなし	シク	"	"	"	はやし	ク	"	"
16	しげし	ク	12	0.697	16	あやなし	ク	7	0.700
"	さびし	シク	"	"	"	つらし	ク	"	"
18	いたし	ク	11	0.639	18	かたし	ク	6	0.600
19	ひさし	シク	10	0.581	"	つれもなし	ク	"	"
20	くるし	シク	9	0.523	"	ほし	シク	"	"

いて、平安時代の和歌の持つ性質があらわれていると言え

ても、連綿とした変化の流れがあり、歌語の歴史的変遷と

順位	1	2	3	4	5	6	7	"	9	10	11	12	"	14	"	16	"	18	19	20
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	---	----	---	----	---	----	----	----

いて、平安時代の和歌の持つ性質があらわれていると言え
るだろう。

小項目ごとに細かく考察していくと、「新古今」「古今」
ともに自然界または抽象的關係に多く目を向けている。こ
れは、ともに自然または客観に関する主題と、人事または
主観に関する主題とを結合して、一つの新しい世界を創造
する手法を取るためであろう。しかし、その時「古今」の
場合、自然はあくまでも主観を導くための比喩であり暗示
である。そして、そこには強く抒情する人間が存在してい
るのである。一方、「新古今」の場合、人事や主観を直接
吐露するのではなく、自然や客観的、抽象的な事柄に目を
向け、そのもの言わぬ言葉を感じ化された美に昇華し、幽
玄体という抒情を醸し出しているのである。

以上のように表11より、「新古今」は「古今」と語彙構
造上、類似した傾向を示すと言えるが、「古今」より更に
人間活動の主体は少なくなり、生産物、用具などより、自
然界や抽象的關係の言葉を多用して、特徴ある「新古今」
の世界を創造していると言える。

従来、古今集は、万葉に比べて人間活動の主体はよりせ
まく限られ、その目は周辺の生産物よりは、むしろ自然界
ないしは時間の推移などの、やや抽象的な事柄に向けられ
ることが多かったと云われている。この「万葉」と「古今」
の關係は、「古今」と「新古今」のそれとよく似ている。
名詞だけのことではあるが、「万葉」から「古今」を経
て「新古今」に至る時間の経過に従い、語彙構造上におい

ても、連続とした変化の流れがあり、歌語の歴史の変遷と
して、その傾向を垣間見ることができたと言えよう。

第二節 単独使用語と共通語

この節では、前節から更に、語彙の特徴の他の面として
語彙の作品間の關係を見て行く。

各作品の異なり語、延べ語中、どの程度がその作品だけ
に使用されているかは、第二章第一節より「新古今」六〇
・四％、一八・二％、「古今」四二・九％、一三・三％と
なっていて、「新古今」では基礎的、一般的な語のあら
われる比率より、より「新古今」だけにあらわれる独自の
語を使うことが多いと言えるだろう。

そこで、それぞれの作品の内部における単独使用語と共
通語の出現する割合を百分比で表示して表12を得た。これ
より、「新古今」と「古今」はともに自然現象や植物、ま
た時間や空間に関する語が多く使用されているのが分かる。
これは、「古今」はその特色として指摘される、自然と人
事を融合させる手法を用いて、現実性を有する世界を時間
の経過のなかで創出していった。そして「新古今」は、こ
のような「古今」を模範としてなされたものであるから、
前述のような結果があらわれたものと考えられるのである。

単独使用語でも、「新古今」「古今」とも(5)項や(1)項が
豊富である。しかし、細かに比較すると相違が見られる。
「古今」は、各項目ごとの差が「新古今」に比べると小さ
く、(5)項以外は、ほぼ万遍なく独自の語が出現し使用され
ていると言える。よって「古今」の方がより広範囲な分野

<表11> 名詞使用語彙数

分類	主たる意義	新古今集					古今集				
		異語数	%	延語数	%	平均使用度数	異語数	%	延語数	%	平均使用度数
1	抽象的關係	309	18.64	2,676	27.14	8.7	234	20.35	6,430	26.61	6.1
1 a	本体・關係	22	1.33	295	2.99	13.4	25	2.17	259	4.82	10.4
1 b	存在・様相	7	0.42	11	0.11	1.6	8	0.70	9	6.17	1.1
1 c	カ・変化	21	1.27	58	0.59	2.8	11	0.96	13	6.24	1.2
1 d	時間・位置	199	12.00	1,993	20.22	10.0	143	12.43	962	17.90	6.7
1 e	形・量・数	60	3.62	319	3.24	5.3	47	4.09	187	3.48	4.0
2	人間活動の主体	231	13.93	1,260	12.78	5.5	150	13.04	945	17.58	6.3
2 a	個人・人間	29	1.75	584	5.92	20.1	29	2.52	592	11.02	20.4
2 b	神仏・精霊	5	0.30	17	0.17	3.4	2	0.17	13	0.24	6.5
2 c	家族・仲間	10	0.60	40	0.41	4.0	12	1.04	23	0.43	1.9
2 d	階級・職業	23	1.39	64	0.65	2.8	14	1.22	39	0.73	2.8
2 e	社会・機関	164	9.89	555	5.63	3.4	93	8.09	278	5.17	3.0
3	人間活動	142	8.56	806	8.18	5.7	137	11.91	552	10.27	4.0
3 a	感情・意志	75	4.52	594	6.02	7.9	69	6.00	380	7.07	5.5
3 b	言動・創作	17	1.03	68	0.69	4.0	16	1.39	73	1.36	4.6
3 c	風俗・社会	27	1.63	77	0.78	2.9	27	2.35	53	0.99	2.0
3 d	交際・支配	16	0.97	59	0.60	3.7	12	1.04	33	0.61	2.8
3 e	経済・業務	7	0.42	8	0.08	1.1	13	1.13	13	0.24	1.0
4	生産物・用具・物品	233	14.05	851	8.63	3.6	134	11.65	334	6.22	2.5
4 a	物品・資材	20	1.21	56	0.57	2.8	17	1.48	29	0.54	1.7
4 b	衣料・装身具	56	3.38	368	3.73	6.6	40	3.48	149	2.77	7
4 c	食料	3	0.18	13	0.13	4.0	5	0.43	6	0.11	1.2
4 d	住居・道具	79	4.76	189	1.92	2.4	36	3.13	55	1.02	1.5
4 e	造營物	75	4.52	225	2.28	3.0	//	//	95	1.77	2.6
5	自然物・自然現象	743	44.81	4,266	43.27	5.7	495	43.04	2,113	39.32	4.3
5 a	刺激	33	1.99	369	3.74	11.2	27	2.35	208	3.87	7.7
5 b	天地・現象	430	25.93	2,368	24.02	5.5	247	21.48	927	17.25	3.8
5 c	植物	210	12.67	1,015	10.30	4.8	150	13.04	618	11.50	4.1
5 d	動物	44	2.65	214	2.17	4.9	44	3.83	185	3.44	4.2
5 e	人体・生命	26	1.57	300	3.04	11.5	27	2.35	175	3.26	6.5
計		1,658		9,859		5.9	1,150		5,374		4.7

<表12> 名詞単独・共通語彙出現率

異 な り 語 数					延 べ 語 数				
分類	主たる意義	新古今	古今	共通	分類	新古今	古今	共 通 語	
1	抽象的關係	16.2	17.6	22.4	1	20.9	21.2	28.6	27.4
1 a	本体・關係	0.7	2.0	2.3	1 a	0.9	2.5	3.5	5.2
1 b	存在・様相	0.4	1.0	0.5	1 b	0.4	0.7	0.1	0.1
1 c	カ・変化	1.6	1.2	0.8	1 c	2.2	0.8	0.2	0.2
1 d	時間・位置	10.1	9.1	14.9	1 d	13.7	10.0	21.7	19.1
1 e	形・量・数	3.4	4.3	4.0	1 e	3.8	7.2	3.1	2.9
2	人間活動の主体	15.3	14.6	11.9	2	12.7	12.6	12.8	18.3
2 a	個人・人間	1.7	3.4	1.8	2 a	1.1	3.2	7.0	12.2
2 b	神仏・精霊	0.3	0	0.3	2 b	0.2	0	0.2	0.3
2 c	家族・仲間	0.3	1.0	1.1	2 c	0.4	1.0	0.4	0.3
2 d	階級・職業	1.5	1.2	1.2	2 d	1.3	1.0	0.5	0.7
2 e	社会・機関	11.5	8.9	7.5	2 e	9.6	7.4	4.7	4.8
3	人間活動	8.4	16.0	8.8	3	8.1	14.2	8.2	9.7
3 a	感情・意志	4.6	8.1	4.4	3 a	4.4	7.2	6.4	7.1
3 b	言動・創作	0.8	1.4	1.4	3 b	0.8	1.4	0.7	1.4
3 c	風俗・社会	1.6	3.2	1.7	3 c	1.4	2.9	0.6	0.7
3 d	交際・支配	1.0	1.2	0.9	3 d	1.3	1.3	0.4	0.5
3 e	経済・業務	0.4	2.0	0.5	3 e	0.3	1.4	0.04	0.1
4	生産物・用具・物品	16.4	13.0	10.7	4	14.0	11.9	7.4	5.3
4 a	物品・資材	1.5	2.4	0.8	4 a	1.1	1.8	0.4	0.3
4 b	衣料・装身具	3.2	3.2	3.7	4 b	2.3	4.1	4.1	2.6
4 c	食料	0.2	6.1	0.3	4 c	0.2	0.4	0.1	0.1
4 d	住居・道具	6.2	3.9	2.6	4 d	6.3	3.1	0.9	0.7
4 e	造営物	5.3	2.8	3.3	4 e	4.1	2.5	1.9	1.7
5	自然物・自然現象	43.8	38.7	46.3	5	44.2	40.1	43.0	39.2
5 a	刺激	1.4	1.6	2.9	5 a	1.3	2.0	4.3	4.2
5 b	天地・現象	27.5	18.7	23.6	5 b	27.7	18.4	23.2	17.1
5 c	植物	12.1	12.6	13.4	5 c	12.1	14.2	9.8	11.1
5 d	動物	1.6	3.2	4.3	5 d	1.9	2.8	2.2	3.5
5 e	人体・生命	1.2	2.6	2.1	5 e	1.2	2.8	3.5	3.3

<表

分類

1

1 a

1 b

1 c

1 d

1 e

2

2 a

2 b

2 c

2 d

2 e

3

3 a

3 b

3 c

3 d

3 e

4

4 a

4 b

4 c

4 d

4 e

5

5 a

5 b

5 c

5 d

5 e

計

の語彙を歌語として取り入れていると言えるだろう。そして、前述した「新古今」における歌語の整理と選択による確立化のあらわれであろうと考えられる。

単独使用語が最多数あらわれる(56)項における使用度数を見ると、一回六四・七%となり、二回まででほぼ八割を占め、単独使用語には共通語と比べて歌語として定着していない語彙が多いと言える。このような性質を持つ単独使用語ではあるが、同時にこの中に各作品の特徴が生じてくるのではないかと思われる。よって高使用度数の単独使用語を調べると、「新古今」では、はっきりと偏りが見られる。「古今」は「新古今」より項目ごとにはらつきが見られる。また、同じ自然に関するものでも「古今」は「たつたがは」といった、対象を限定してしまっているのに、「新古今」ではもっと抽象的、非具体性を持たせられる語彙が見られる。

では、おしなべて、どのような語が多く使用されているだろうか。高使用率上位20語までを表13に示した。共通する語を意義分類すると、前述した双方の類似性と同じ傾向を示している、ひいては平安時代の和歌文学における歌語の特徴と考えられるであろう。しかし、ここでも微少ではあるが相違を認められる。これは、「古今」の方が、人間を主体とした具体的な表現により、美的観念の世界を創出しようとしたのに対し、「新古今」は、隠喩や見立てなどの方法が多く採られ、「詞に現われぬ余情、姿に見えぬ景氣」を備えて、自然感情を「古今」の如く人事と融合する

のではなく、象徴的なイメージにまで感覚化されてしまって、現実感に欠けた、観念的な美の世界を形成している作品の持つ特質によるものと言えるのである。

ところで、「つき」という語は、「新古今」では使用率一位であるのに、「古今」ではとても低い。そこで、「古今」から「新古今」に至る八代集における出現率を比較すると表14となる。自己の感情、感動を思うまま奔放に詠んでいた「万葉」から、しだいに鍛練され、技巧や工夫を凝らすようになるに従い、人事を直接詠み込むのではなく、自然美のイメージを、時には自然そのものを、人事と関係付けたりオーバーラップさせようとするようになり、「新古今」では多くその自然を全面に押し出し、抒情の気分を醸し出そうとしているのである。故に、前述の結果になったのであろう。つまり、月は、「新古今」が創出しようとする世界の求めるイメージを持つ素材であったと言えることだろう。

以上、意義分類により、共通語と単独使用語を考察することによって、「新古今」の持つ特色をあらわすことができたかと思う。

本論

以上、「新古今」を主に「古今」と比較しながら、全語彙、品詞別語彙数及び意義分類の面から考察することによって、和歌文学の特質、各作品の類似性及び個性を探ってきたが、そのことより、次のような結果を得ることができた。

<表 27> 名詞高使用率語

順位	新古今集				順位	古今集			
	分類	語	実数	使用率		分類	語	実数	使用率
1	5 b	つき 月	266	0.0270	1	2 a	ひと 人	231	0.0430
2	2 a	ひと 人	248	0.0252	2	5 c	はな 花	147	0.0274
3	1 d	あき 秋	209	0.0212	3	2 a	わ 我	135	0.0251
4	4 b	そで 袖	167	0.0169	4	1 d	あき 秋	109	0.0203
5	5 c	はな 花	162	0.0164	"	3 a	こころ 心	"	"
6	5 e	み 身	150	0.0154	6	5 e	み 身	83	0.0154
7	5 b	つゆ 露	149	0.0151	7	2 a	きみ 君	80	0.0149
8	3 a	こころ 心	144	0.0146	8	2 a	われ 我	79	0.0147
9	1 d	はる 春	125	0.0127	9	4 a	もの 物	77	0.0143
10	5 b	そら 空	121	0.0123	10	1 d	はる 春	70	0.0130
11	2 a	わ 我	113	0.0115	11	5 a	いろ 色	65	0.0127
12	5 b	かぜ 風	110	0.0112	"	3 b	こと 言	"	"
"	2 e	よ 世	"	"	13	1 d	とき 時	52	0.0097
14	1 d	よ 夜	103	0.0104	14	5 b	やま 山	50	0.0093
15	4 a	もの 物	86	0.0087	15	1 d	いま 今	49	0.0091
16	5 a	いろ 色	82	0.0083	16	5 b	かぜ 風	48	0.0089
17	3 a	ゆめ 夢	78	0.0079	17	2 e	よ 世	45	0.0084
18	1 d	むかし 昔	76	0.0077	18	1 d	よ 夜	41	0.0076
19	5 b	なみ 波	70	0.0071	19	3 b	な 名	39	0.0073
20	1 d	けふ 今日	69	0.0070	20	4 b	そで 袖	38	0.0071
"	5 b	やま 山	"	"	"	5 b	ゆき 雪	"	"

しようとしたの以文し
 の方法が多く扱られ、「詞に現われぬ余情、姿に見えぬ景
 気」を備えて、自然感情を「古今」の如く人事と融合する

きたが、そのことより、次のような結果を得ることができ
 た。

<表 28>
八代集における「つき」の使用比較

作品名	使用度数	%
古 今	27	2.4
後 撰	51	3.6
拾 遺	58	4.3
後 拾 遺	107	8.8
金 葉	87	12.6
詞 花	60	14.6
千 載	162	12.6
新 古 今	266	13.3

まず、「新古今」は「古今」の約二倍弱の大きさをもち、随筆や物語文学に匹敵する、比較的大きな作品と言える。更に、品詞別に分類比較していくことにより、「万葉」から「古今」、「新古今」へと素材が多様化し、描写、叙述の複雑化が進んだことが分かった。「新古今」は、「古今」に比べて同語の繰返し使用という傾向が認められ、歌語として整理され、確立化していると考えられ、基本語彙をも見出すことができた。類似性の高い二作品であるが、形容詞では、「新古今」は比較的状态表現が多く、「古今」は心理描写が多いと言えるように、相違が見られた。意義分

類により、更にこの相違を明確化することを試みた。二作品とも自然界または抽象的關係に多く目を向けていることが分かった。しかし、「新古今」の方が、この傾向が強く、特徴ある「新古今」の世界を創造していると言える。そして、これは、歌として形を成した「万葉」の頃から時代の変遷とともに、しだいに「新古今」で見られるような特質を形成してきたのである。

「新古今」も「古今」も、既に多くの研究がなされており、これらの結果は、その足元にも及ばぬものであるが、独自の調査に基づいた資料は、多少なりともその特質、個性を表出し得たかと思うものである。